

モクマオウによる影響

地域固有の景観の阻害、落ち葉による道路や公園などの維持管理への影響があります。また、落ち葉が林床に蓄積することで在来種の生育が阻害されるなどの影響もあります。



侵入したモクマオウによる景観の阻害

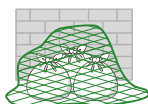


モクマオウの大量の落ち葉で在来種の生育を阻害



モクマオウが侵入した海岸植生

廃棄方法



大きな株は木材の処理方法にしたがってください。種子がついている場合は、落ちないように密閉して運んでください。

根絶までの流れ

伐採後は萌芽して再生したり、落ちた種子から再生することがあります。伐採した切り株は1年程度は確認し、枝葉が伸びていた場合は、その部分に薬剤を塗布してください。

わたしたちの鹿児島、わたしたちで守ろう。

Let's protect Kagoshima's native species by ourselves.

》 外来種から鹿児島県の生物多様性を守るために

鹿児島県は南北600kmにも及ぶ県土や3つの気候帯を有しています。また、波瀬線を挟んだ2つの生物地理区に属しており、鹿児島県の多くの島々には、固有種、希少種が生息・生育し、独特な生態系が存在します。このため、動植物が持ち込まれることで、生態系に影響を及ぼす侵略的外来種となる場合があります。

世界自然遺産である屋久島や奄美大島及び徳之島でも、外来種が野生化し定着することで、生態系への被害やそのおそれが生じています。

これらのことを十分に理解し、安易に県内へ動植物を持ち込むことのないようにしましょう。

外来種被害予防3原則



》 外来種は悪者なの？

外来種は、意図的又は非意図的に自然分布域外に持ち込まれた生物です。被害を受ける在来種同様、生態系や人の生活環境への被害を防止するために防除される侵略的外来種もまた「被害者」です。そのことを理解し、自らが新たな外来種問題の原因者とならないよう十分に気をつけましょう。

本県の外来種の詳しい情報については！ [鹿児島県 外来種](https://www.pref.kagoshima.jp/kurashi-kankyo/kankyo/yasei/gairai/index.html)

鹿児島県の外来種の詳しい情報については、鹿児島県のホームページをご覧ください。

<https://www.pref.kagoshima.jp/kurashi-kankyo/kankyo/yasei/gairai/index.html>



鹿児島県にお住まいの方向け

モクマオウ防除マニュアル

モクマオウのうちトクサバモクマオウは、鹿児島県外来種リストにおいて防除対策について検討が必要な種とする「一般防除種」に選定されています。



モクマオウってこんな植物

モクマオウ

モクマオウ科
モクマオウは世界で約100種が確認されており、県内では特にオーストラリア原産のトクサバモクマオウが広く定着しています。

環境省カテゴリー：重点対策外来種(トクサバモクマオウ)

鹿児島県カテゴリー：一般防除種(トクサバモクマオウ)

県内移入分布：奄美群島、トカラ列島、種子島、屋久島、南大隅町、南さつま市、鹿児島市、阿久根市



モクマオウは、海からの風や砂から集落や農地等を守るために主に県内の海浜地周辺に植栽されてきました。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
開花												
結実												
伐採・薬剤塗布・薬剤注入・抜き取り												



導入

トクサバモクマオウは、琉球には明治初期、小笠原には1879(明治12)年に導入され、野生化しました。

形態

高さ7~10m程度で、最大20mになる常緑の高木です。スギやマツのような針葉樹に見えますが、広葉樹です。

葉

葉は小さく退化しており、葉のように見えるものは葉状枝です。葉状枝は細長い線形に並び、スギナ(土筆)の枝に似ています。

花

トクサバモクマオウは、雄花も雌花も同じ株に咲きます。カンニンガムモクマオウは、雄花と雌花が別々の株に咲きます。

繁殖

種子で増え、植栽された場所から広がっています。

モクマオウの防除方法

主な生育地

防風林として植栽されたものもあり、海岸付近でよく見られます。

ここを
チェック!

伐採・薬剤塗布・薬剤注入・抜き取り

時期 ● 一年中

除去方法

実生などの稚幼樹の場合
地際の直径1cm程度の稚幼樹は、手やペンチなどの道具を使って抜き取りましょう。

地際の直径2cm未満又は抜き取り・薬剤注入が困難な小径木の場合
手鋸などで地際を切り、その切断面に薬剤を塗布しましょう。

地際の直径2cm以上かつ樹高1m以上でドリルによる穿孔が可能な立木の場合
薬剤注入による駆除を行います。地上高30cmの位置にハンドドリル等を用いて4方向から穴を開けます。薬剤の注入量は、地際の直径10cm未満で1~2mL、10~15cmで3mL、15~40cmで5mLとします。地際の直径に応じた適量を、開けた穴の数の均等に割り、各穴に直接注入してください。その後、薬剤が濡れないよう木栓でしっかりと封止します。

- 薬剤注入の場合は、木が枯れた後は手を加えることなく、自然に倒れるのを待つ形となります(現在、小笠原での主流な手法です)。
- 道路沿いや歩道脇に生育している大径木は、伐採駆除や特殊伐採を行います。
- 特殊伐採とは、周囲に配慮すべき植物が生育する場合や建物や道路がある場合、樹幹に登り、高所の枝から徐々に伐採を行う方法です。これには、専門的な技術や安全管理が必要となります。そのため、専門の業者に依頼して防除を実施しましょう。

各防除手法のメリット・デメリット

手法	メリット	デメリット
伐採のみ	倒木の危険を即座に排除できます	萌芽再生しやすいので、薬剤処理を併用しないと繰り返しの伐採が必要になります。
伐採・薬剤塗布	薬剤注入や抜き取りができない小径木に有効です。地際で切断することで再生速度を遅らせます。	薬剤で周辺の植物が枯れたり、伐採作業に手間がかかるなど課題があります。
薬剤注入	設備が軽量で効率的です。再生が少なく、立木が残るため、林内環境の急変を避けられます。また、薬剤管理が容易です。	小さい個体では薬剤が濡れる場合があります。完全には枯死せずに、萌芽再生することがあります。
抜き取り	薬剤を使用せずに駆除が可能です。	根が残ると再生します。大きなものには実施困難です。

防除に必要な資材

手法に応じて以下の資材が必要となります。



薬剤注入

電気ドリルまたはハンドドリル(9mm~12.5mmビット)、分注器(薬剤注入用)、グリホサート系薬剤(製品例:ラウンドアップマックスロードなど)、木栓またはコルク栓

伐採・塗布

手鋸、枝切鉋

抜き取り

ペンチ、ウォーターポンププライヤー(素手で困難な場合)

伐採・安全管理

チェーンソー、ロープ、クライミングギア(ハーネス等)、防護スボン又はチャップス等、ヘルメット、注意喚起看板、無線機

薬剤使用時および作業時の留意事項

環境への配慮

薬剤成分が土壌や水系へ流出するのを防ぐため、必要最低限の使用量を抑えます。注入後は必ず木栓等で蓋をしてください。

サイズによる薬量

個体サイズ(地際の直径)によって枯死に必要な薬量が異なります。小さなサイズほど、注入穴の容積に対して必要な薬剤が少なくなり、効果にはばらつきが出やすい傾向があります。なお、1か月が経過しても枯死しない場合は、再度、薬剤注入を行ってください。

周辺個体への影響

薬剤が根系同士の結合を介して薬剤注入又は薬剤塗布していないモクマオウにも影響を及ぼし、意図せず枯死させる可能性があります。

安全確保

崖地では落石事故防止のため作業員が上下にならないようにし、2名以上で連絡を取り合いながら作業してください。道路沿いでは誘導員を配置します。

萌芽再生の確認

モクマオウは再生力が強いので、駆除の翌年も生残確認を行うことが望ましいです。

抜き取り個体の処理

抜き取った個体は根が土に触れると再生するため、岩の上などに集積してください。

よく似た在来種

マツ類(リュウキュウマツ、クロマツ、アカマツ)